



建学の精神

活水学院は、キリスト教を「建学の精神」として1879年(明治12)に設立されました。スクール・モットーは、創設者エリザベス・ラッセルが常に教えていた「知恵と生命との泉－主イエス・キリストに拘べよ」です。ラッセルはイエス・キリストとの人格的出会いこそが、教育の最良で最高の土台であると確信し、人が生きるために必要な知恵と生命を、尽きることのないイエス・キリストという泉から汲みなさいと教えました。

校名は、「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の中で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(ヨハネによる福音書4章14節)という聖句に由来しています。永遠の命を宿す「活ける水」はイエス・キリストご自身の象徴であり、その泉からわき出る水を飲む人はリフレッシュされ、潤い豊かな人生を歩むことができると約束されています。



活水学院 校章・マーク
篆書体の「活」を中心に配し、「水」を3本の線に崩してギリシャ十字にかたどったデザイン。神様が注がれる「活ける水」を受け入れるために上部が開かれ、その恵みが全体をめぐる右の注ぎ口からあふれます。

学校法人 活水学院

〒850-8515 長崎県長崎市東山手町1-50

TEL : 095-822-4107 FAX : 095-828-3702



創立

1873年(明治6)に来日して、長崎・出島で宣教していたアメリカ・メソジスト監督教会派遣の宣教師J・C・デビソンは、教会活動と並んで学校教育が必要であることを痛感し、本国の教会に働き人を送ってくれるように要請しました。それに応じて来日した女性宣教師エリザベス・ラッセルとその協力者、ジーン・M・ギールは、来崎わずか1週間後の1879年(明治12)12月1日に〈活水女学校〉を開校しました。赴任時ラッセルは43歳で以後83歳までの40年間活水一筋に活動することになります。外国人居留地にある東山手十六番館を借り受けて始められた女学校の入学者は、官梅能ただ1人でした。翌年、生徒数の増加に伴い、南山手十六番へ移転。開港2年目に生徒が18人になると、ラッセルはアメリカの教会に新校舎建設のための資金援助を願い出ます。1882年(明治15)オランダ坂を上った先に広がる丘(現在活水女子大学がある)に、待望の新校舎が完成しました。

初期の活水女学校は、生徒全員が寄宿舎生活を送り、生活をともにする中で、学問する喜びとキリストの尽きぬ生命の泉への感謝の思いが、生徒たちに伝わっていきました。ギールの指導で始まった聖書研究クラスは実践的な女子伝道者(バイブルウーマン)養成のクラスでしたが、やがて神学科へと発展します。

活水女学校の教育はその内容と方法において先駆性を発揮しました。学校で音楽教育がまだ実施に至っていなかった時期にすでに活水女学校では音楽教育に取り組み、学外からも評価を得ていました。また2代目校長のマリアナ・ヤングは、長崎における体育の向上を目指して、「新式体操」を導入しています。市内の劇場でデモンストレーションを行ない、関係者の注目を集めました。

英語や技芸などの分野においても、高い修練を積んだアメリカ人教師の指導のもと高度な教材や機器を積極的に導入して、高水準の教育を展開し教育界をリードしました。

創立の背景と歴史

創立者のラッセルは、1836年アメリカ・オハイオ州ケイデイスに生まれ、ワシントン・セミノリーを卒業して各地で教師を務めました。在学中、長老派のエジプト派遣宣教師の報告を聞いて、海外伝道に関心を寄せます。1873年(明治6)バージニア州で結成されたアメリカ・メソジスト監督教会婦人外国伝道協会の書記になり、やがて出島メソジスト教会のデビソン宣教師の要請に応える形で来日することになります。ラッセルは40年にわたってキリスト教精神に基づく女子教育に献身して帰国。1928年(昭和3)天に召されオハイオ州デラウェアの墓地に葬られています。墓碑には「If you could see it, you would find the girlhood of Japan on my heart.」というラッセルの真意を表わす言葉が刻まれています。

ラッセルとギールを派遣したメソジスト婦人外国伝道協会(WFMS)は、海外のキリスト教を知らない人々に福音を伝えることを目的としていますが、そのため学校、病院、施療所、孤児院をつくったり、市中で日曜学校や婦人集会、聖書講義を行ないました。1893年(明治26)の津波により身寄りを失った女兒を引き受けて養育するために〈活水女園〉が始められたのもその働きの一環です。施設は最初熊本に設けられましたが、のちに大村に移され、その跡地は現在も活水学院の所有地として残っています。その同じ大村市に、2009年(平成21)4月、活水女子大学看護学部が開設されました。活水学院の歴史を継承する出来事ということが出来ます。

1899年(明治32)の文部省「訓令第12号」は、キリスト教主義の学校にとって、高等女学校の地位を取るかキリスト教教育の保持を取るか二者択一を迫るものでした。建学の精神であるキリスト教を教えられないということは、とても容認できないことでした。そのためヤング校長率いる活水学院は、建学の精神を貫く決断をしました。このことによって生徒が一時減少しましたが、1912年(明治45)には高等女学校と同等の教育機関であるとの認可を得ることができました。

1882年(明治15)に最初の校舎が完成したときに、ラッセルはWFMSに「3人の宣教師と日本人教師2、3名が与えられれば100名の生徒を教育できるだろう」と書き送っています。この願いは次第に実現していき、生徒数も増加していきました。しかし多くの艱難もありました。ラッセルは、「活水は祈りの子であった」という言葉を残しています。

現在、活水女子大学がある東山手キャンパスの大きな楠のかたわらには、歴代の宣教師を記念する石碑があり、76名の名前が刻まれています(うち2名は現在も働いています)。これらの宣教師たちの祈りと奉仕に支えられて、活水学院の歩みは進められてきました。宣教師たちの教えと立ち居振る舞いは、今も生徒・学生に善い感化を与え、成長の糧となっています。



左：創立者 Elizabeth Russell (1836～1928年)
「知恵と生命との泉に拘びなさい」と教えました。
右：協力者 Jean M.Gheer

